ぱちぱち『桜の園』SPAC 観劇ツアー　　関口真生

12/12 の早朝から静岡行きのバスに乗り、芝居を 2 本見たあと一泊して 13 の朝には帰るという弾丸スケジュールだった SPAC。チャーターバスを逃して舞台芸術公園まで走るなどいろいろなハプニングがあったもののどれも良い経験だった。まず驚いたのはその外観。見通しの良い通りに出て、富士山の形をした建物が見えた時私は思わずうおおおと声を上げた（一人だけど）。富士山と SPAC が並んでいるこの構図は、なんとも言えぬワクワク感をそそる。東京の劇場にはないこの感じ。彩の国さいたま芸術劇場に初めて行った時もその外観と建築の巧みに圧倒されたが、それに近い。

ロビーをうろうろしながら時間を潰して、プレトークを聞く。農奴解放令は日本で言う農地改革、なるほど。そして桜の園は悲劇なのか、喜劇なのか。チェーホフは喜劇のつもりで書いたけど、さあ今回の演出はいかに…って感じで終わる。

神西さん訳の「桜の園」が、高校で買わされて読んでないまま家にあったので読んだ。その時には喜劇的な要素が強いと思った。そしてラネーフスカヤのとんちんかんな様子に腹が立った。

14:00-『桜の園』観劇。
チェーホフも農奴出身であるためロパーヒンの心情表現が丁寧だ、というプレトークがあったが、今回の桜の園はロパーヒンが主役であったように思う。鈴木さんへのインタビューの中で、最初は、「ワーニャおじさん」を上演する予定だったが、コロナを考慮して「桜の園」になったと聞き、コロナ禍において桜の園を上演する意義とは何なのかを改めて考えさせられた。先祖代々農奴だとしても努力次第で豪邸が買えるという資本主義の象徴としてロパーヒンを主役にしているのか、はたまた農奴出身のロパーヒンに社会的弱者や生き辛さを感じる人を投影しているのか、私の中でロパーヒンの見解には表裏ある。

（今回インタビューにご協力頂いた SPAC の俳優 鈴木陽代さん）

今回の演出は時間の流れが遅く感じた。日本人はミュージカルやショーのように、明らかに見た目が変わったり出来事が展開する芝居の方を好む傾向があると思っているが、フランスではどのような演劇スタイルが主流なのか気になった。私の知っているフランス演劇は今回の『桜の園』、同日に見た『夢と錯乱』、知識で知っている『ゴドーを待ちながら』など、時間の流れが遅いものが多い。ただ SPAC で観た前者 2 作品は、フランス演劇云々ではなくクロード・レジの演出技法の影響らしい。鈴木さん情報によると、桜の園の演出のダニエル・ジャンヌトーは以前クロード・レジの舞台の美術を担当していて、彼の影響をかなり受けているのだとか。そのため、「中高生鑑賞事業があるため上演時間をできるだけ短く」という SPAC 側からの要請があっても、ダニエルは役者に台詞を急かしたり間を詰めるよう指示したりは一度もしなかったそう。これはとても興味深い。

フランス人と日本人の共同創作という、コロナ禍ではハードルの高い作品だった。しかし、

制作の計見さんへのインタビューでは、そんな苦労が楽に思える位に大変だった時期について教えていただいた。SPAC の要である海外の演出家を招いた創作は緊急事態宣言下では困難だった。そのため 2020 年の『みつばち共和国』は演出家が zoom から稽古場の様子を見て、遠隔で演出をつけるという方式がとられたそうだ。終わりが見えないオンライン生活に手探りだった時期と比べれば、演出家も役者も来日できて共に創作した 2021 年は SPAC 全体にとって活気づいた年だったのかもしれない。たとえマスク付きの上演だったとしても。また、制作の仕事に関心がある私にとって計見さんのキャリア、仕事への姿勢は大変勉強になった。やはり海外在住の経験はどの分野においても強いですね。私もいつか...？

『夢と錯乱』もとても良くて、SPAC の劇評コンクールにはこの作品で応募した。 SPAC での様々な体験も、お二方へのインタビューも含めとても勉強になりました。自分の演劇への興味の範囲がさらに広がったような気がします。ありがとうございました。